

巻 頭 言

総務省統計局(2023)によれば、現在の日本の平均寿命は男性で81.05歳。女性で87.09歳であり、男女併せると、我が国は世界一の長寿国である。そして、65歳以上の高齢者人口は3,627万人、総人口に占める割合は29.1%であり、我が国は3.5人に1人が高齢者という超高齢社会にある。この高齢者人口は増加を続け、第二次ベビーブーム世代が老年人口に入った後の2043年に3,953万人でピークを迎え、その後は一貫して減少に転じる。しかし、年少人口ならびに生産年齢人口の減少が続くことによる相対的な増大により、2070年に総人口の38.7%、すなわち2.6人に1人が高齢者になると推計されている(国立社会保障・人口問題研究所, 2023)。

長寿は喜ばしいことであるが、国民の半数が80歳以上になる我が国において、健康のまま歳を重ねることは難しい。日常生活に支障なく暮らすことができる期間を健康寿命と言うが、平均寿命と健康寿命の差(つまり不健康な期間)をいかに減らすかが重要な問題となる。平均寿命が延びれば、どうしてもこの不健康な期間も一緒に延びてしまうからである。平均寿命が延長しても、それは要介護状態の期間が延長するだけだというデータが、海外で報告されている。しかし、仮に高齢者が要介護状態になったとしても、「住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを、人生の最後まで送る」ことができれば、大変に素晴らしいことである。

こうした背景からも、医療、介護、予防、生活支援に渡る包括的なケアという考え方が非常に重要になってきており、現在、まさにそうしたニーズに対応できる地域包括ケアシステムの構築が、それぞれの地域で求められている。そのためには、医療だけでなく、介護や生活支援など、幅広く俯瞰的な視点を持った医療福祉人材が必要になり、県立広島大学保健福祉学部は、こうした人材の養成を使命としている。

超高齢社会において保健福祉学部への期待は高く、我々の学術的な取り組みを社会に伝える本学部誌「人間と科学」の意義は大きい。地域の問題を共有・理解した上で、新しい学問的知見を提供し、社会に貢献するため、我々は真摯な態度で研究に取り組み、その結果を積極的に公表していく必要がある。そうした日々の取り組みにより、保健福祉学部がさらに学問的・社会的に寄与できる組織へと育つことを強く願うものである。

県立広島大学 保健福祉学部

伊集院 睦雄